様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３３８０

研究課題名（和文）三線が引き出す社会関係、価値、感情――大衆楽器が人びとに与える効果の研究

研究課題名（英文）he Social Relations, Values, and Emotions Expressed with Sanshin: A Study of the Impact of a Popular Musical Instrument on People

研究代表者
栗山　新也（KURIYAMA, SHINYA）

国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・外来研究員

研究者番号：４０７８２０６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：三線は親族や友人、三線仲間、師弟などの関係の中で人から人へと渡り、実用性や工芸品としての価値とともに「履歴」が積み重なっていく。三線が継承される過程では実用性、工芸品としての価値だけでなく、お礼の品、記念品、誰それが演奏した、形見の品などの価値が付与されていた。また価値は固定的・一義的なものではなく、継承の過程で推移し積み重なっていくものであることが明らかになった。三線が持つ関係の象徴的価値は総じて重要視されていた。三線は前の所有者との関係だけでなく、長期にわたって三線を継承してきた人々の関係の連なりを蓄積し、過去に三線を継承してきた人々の関係や思いを想像させる媒体として機能していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの三線に関する調査研究は、「名器」「文化財」など、人からモノに対する一方的な価値観を前提にして調査が行われてきた。これに対してこの研究では、三線を、継承される過程で、人々の関係を媒介し、価値や感情を喚起し続けるモノとして捉え、三線が引き出す多様で重層的な人間関係、価値や感情のありようを浮かび上がらせた。このような視点・方法論は、他の大衆楽器や、文化財、骨董品、美術品など多様なモノと人との関係の分析へも応用が期待されよう。

研究成果の概要（英文）：Sanshins (Okinawan traditional three-stringed instrument) are passed from person to person through relationships with relatives, friends, fellow sanshin players, masters and students, accumulating "history" along with value as a practical and craft item. In the process of handing down the sanshin, not only did it have value as a practical and craft item, but it also had value as a courtesy gift, a memorial gift, a memento of someone who played it, or a keepsake. In addition, it became clear that value is not fixed and monolithic, but shifts and accumulates in the process of inheritance. The symbolic value of the relationship of the sanshin tended to be highly valued in general. In addition to the relationship with the previous owner, sanshins accumulated a series of relationships among the people who had inherited the sanshin over a long period of time, and functioned as a medium to imagine the relationships and thoughts of the people who had inherited the sanshin in the past.

研究分野：民族音楽学

キーワード：文化人類学　楽器　物質文化　沖縄芸能

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）三線の所有状況・研究状況

三線とは、沖縄や奄美大島などで使用される弦楽器である。15 世紀以降、琉球王国の宮廷楽器として発展し、明治期以降、民衆にも広く普及した。現在、琉球王国時代に製作された一部の三線は沖縄県指定有形文化財に指定され、博物館や大学で保管されている。それ以外の古い三線は個人が所有している。戦前に移民や出稼ぎ者が沖縄の外に持ち出すことによって戦火を逃れた三線も多く、ハワイや南北アメリカ、日本本土などの地域に居住する沖縄系移民・出稼ぎ者の子孫が貴重な三線を所有している事例もみられる。三線の多くは家族や親族などによって代々継承されているが、個人的な売買や取引などによって家族や親族以外の人びとに渡ることも多い。

このような背景のもと、これまでの三線を対象にした研究は、近世における三線の伝播の過程とその受容に焦点を当てた研究や、名器や古い三線のみに焦点を当てた大規模な記録調査が主であった。後者の記録調査では、沖縄に存在する昭和初期以前に製作された三線を対象に、所在、所有者、製作時期、形状、材質、来歴などの詳細が調査・記録されてきた。

（２）申請者のこれまでの調査・研究

近年、人類学では、中心的な主体としての人間に対しモノを従属的な客体とみる従来の人間中心的な物質文化研究から脱却し、モノに視点を与え、モノが人びとに対してどのような行為や価値を引き出すのかという点に目が向けられるようになった。このような視点を踏まえ、申請者は、三線を社会関係を誘発する媒介物と捉え直し、沖縄からの移民地・ハワイに持ち込まれた古い三線が、どのような人間関係を媒介してきたのか明らかにしてきた。

この研究では、ハワイに渡った後、再び沖縄に戻ってきた「里帰り」三線の継承過程を分析することにより、三線が親族や友人、師弟などの関係を媒介しながら沖縄とハワイとの間の地域間ネットワークを構築していく姿を明らかにした。また本研究計画の予備的調査として、「里帰り」三線の譲渡や取引の過程を明らかにした。その結果、同じ一丁の三線をめぐって楽器としての実用性だけでなく、文化財的価値、骨董品、形見の品、家の格を示す、等の多様な価値が付与されていた。これまでの研究が、三線を「名器」「文化財」という価値基準で扱い、三線の意味や価値を固定的・限定的にとらえてきたのに対し、この予備的調査では、三線が継承される過程で、多様で重層的な価値を喚起してきたことが明らかになった。

以上のような予備的な研究成果から、三線がいかなる社会関係を誘発してきたのか、またいかなる価値や感情を引き出してきたのかについて、移民・出稼ぎ地や沖縄で継承されている三線などにも研究対象を広げて分析し、そこから三線が人びとに与える多面的な効果を解明する。

２．研究の目的

本研究は、沖縄の三線を事例に、大衆楽器が人びとに対してどのような効果を与えてきたのか明らかにすることを目的とする。
この目的を達成するために、本研究では、沖縄で継承されてきた三線、および移民地に渡った三線を対象とし、以下の三点を明らかにする。
ア．三線がいかなる社会関係を媒介してきたのか。
イ．三線がいかなる価値を喚起してきたのか。
ウ．三線がいかなる感情を喚起してきたのか。

３．研究の方法

「１．研究開始当初の背景」をもとに、本研究では、三線がどのような社会関係を媒介してきたのか、またどのような価値や感情を引き出してきたのかを明らかにし、そこから三線が人びとに与える多面的な効果を解明する。既述のように、三線は、沖縄で継承されるとともに、沖縄の人びとの移民地・出稼ぎ地でも継承されてきた。このような背景を踏まえ、本研究では、三線文化の拡がりを沖縄という地理的範域だけでなく移民・出稼ぎ地も含めて捉えることで、本研究課題の達成を目指したい。研究対象を以下のとおりである。

①ハワイの沖縄系移民の子孫が所有する三線。
②関西（大阪・兵庫）、関東（東京・神奈川）の沖縄出身者が所有する三線
③沖縄在住の琉球古典音楽、沖縄民謡、八重山民謡の師匠が所有する三線

ハワイは移民地、関西・関東は出稼ぎ地として沖縄の人びとの移動が最も集中した地域であることから対象地域とした。また沖縄では、琉球古典音楽、沖縄民謡、八重山民謡の師匠が古い三線を所有している事例が多いことから彼らを調査対象とした。以上の三線を対象にして、

ア．三線がどのような人たちによって継承されてきたのか分析し、三線の社会生成の媒介物と

しての働きを解明する。
イ．三線が継承される過程でどのような価値が付与されてきたのか分析し、三線が持つ多様で重層的な価値のありようを解明する。
ウ.現在や過去の三線の所有者が三線に対してどのような思いや愛着をもってきたのか分析し、三線がもつ感情を喚起する働きを解明する。

４．研究成果

三線は親族や友人、三線仲間、師弟などの関係の中で人の手から人の手へと渡っていき、実用性や工芸品としての価値とともに、「履歴」が積み重なっていく。これは骨董品や三味線など他の伝統楽器でも評価される。三線の場合、市場が沖縄の人々（沖縄以外の地域に住む沖縄出身者、二世・三世…を含む）にほぼ限られ、演奏者のつながりが密で個人間の取引が活発である点が特徴である。

三線が継承される過程では、三線に対して様々な価値が付与されていた。具体的には、実用性や工芸品としての価値だけでなく、お礼や感謝の意が込められたモノ、記念品、誰それが演奏した、形見の品などの価値が付与されていた。また三線が人から人へと渡ることによって、楽器としての実用的価値から記念品的価値・関係性の象徴的価値へと価値付けが推移する事例がみられた。この価値付けの変化には、譲渡された経緯や、現在の所有者と前の所有者との人間関係が大きく反映されていた。三線の価値は、固定的・一義的なものではなく、その継承の過程で推移し、積み重なっていくものであることが明らかになった。なお、本研究は沖縄の外に移動した人々が所有する三線を対象としたが、移動による所有者の価値観の変化は見られなかった。

「形見の品」「誰それから譲り受けた三線」といったように、三線が持つ関係の象徴的価値は、総じて重要視される傾向がみられた。三線が象徴する人間関係のありように着目すると、三線は前の所有者との関係を象徴するだけでなく、長期にわたって三線を継承してきた人々の関係の連なりを蓄積し、さらに過去に三線を継承してきた人々の関係を想像させる媒体として機能していた。また三線を受け継ぐことが、過去の所有者や製作者の芸能継承への思いを受け継ぐこととして捉えられている事例がみられた。

三線の用途に着目すると、演奏用の楽器として使用価値が見出される場合と、楽器としては使用せず所有すること自体に価値が見出される場合とに大きく分けられる。大切な三線だからこそ弾かずに保管しようという者もあれば、だからこそ演奏しようという者もあった。これと同様に、希少価値の高い戦前に製作された三線の沖縄社会での動向をみると、個人宅で大切に保管されたり博物館に寄贈されたりして楽器としての使用価値が見出されなく事例もあれば、一方で演奏に使用され続けている事例もまた存在する。どのような価値が強調され、どのように利用されるかについては、三線の所有者や取り巻く人々の意向（所有者が演奏に使用してこそ意味を成すと考えているなど）、演奏活動の有無、三線に対する社会的な価値付けの推移（文化財指定など）といった多様な要因が影響しているものと考えられる。今後、三線の価値や用途の揺らぎにどのような要因が影響しているのかについて、さらなる検討を加える必要があろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 栗山新也
２．発表標題 三線の移動と積み重なる価値――大阪、ハワイの事例をもとに
３．学会等名 国際日本学研究会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 栗山新也
２．発表標題 三線の製作・流通・社会的価値付けの諸特徴――明治期から昭和期までを対象に
３．学会等名 日本音楽学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 栗山新也
２．発表標題 1990年代以降の三線音楽へのまなざしと三線文化の変化
３．学会等名 東洋音楽学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 栗山新也
２．発表標題 三線に積み重なる価値と人間関係
３．学会等名 同時代史学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 久万田 晋、三島 わかな	４．発行年 2020年
２．出版社 七月社	５．総ページ数 384
３．書名 沖縄芸能のダイナミズム【共著】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関